

かつて梶原^{*1}は四国の秘境であった。高知と愛媛の境に近く、山地に守られた柚の里である。精神科医で常に社会評論の筆鋒鋭い野田正彰^{*2}に同行して、今に残るお神楽を見て回っていた、その一コマである。元来、夜通し踊り明

かし、岩戸を閉じて隠れた女性神天照大身の神を呼び出し、日の光に満ちたこの世の安寧を祈る神事は、ことのほか世俗的なシナリオに基づいていた。精神医学的には、踊り手たちの役になりきる心理的過程が取材の対象として大変興味深いとのことであったが、本堂の再建が成ったばかりの三鳴神社でのこのお神楽の一夜を忘れることはできない。

延喜13年（913年）藤原経高が土佐の津野山郷へ入国し、伊予の国より三鳴神社を歓請して守護神として祀られた時から、代々の神官によって歌い継ぎ、舞い継がれたものとされている。



写真97-1 お神楽奉納

*1 梶原（ゆすはら）町：高知県高岡郡の町。2009年、環境モデル都市に選定される
*2 野田正彰（1944〜）：高知県出身の精神科医、評論家、ノンフィクション作家。専攻は比較文化精神医学



図版97-1 三鳴神社

1945年の敗戦と神楽修得者の減少により、一時すたれかかったが、1948年神楽復興の気運が高まり、『津野山神楽保存会』が設立された。現在も一千年の歴史を舞い継がれてきた津野山神楽は伝承されている。

山奥の村に残された神事の一部始終は、空間的にも村全体のお祭りである。その日も、丘の上の境内から舞台のある本殿に至る、道すがらの踊り手たちの行列から始まった。また、文字通り「無礼講」のこの行事では、初対面の我々でもその前夜から家々を巡っては座敷をぶち抜いた宴会に寄せてもらうことができた。机一杯に並べられた家庭料理と、お酒の類いに寒い夜にも拘わらず体と心の芯から暖かくなった。そして、夜通しの神楽に向かったのである。

こうした特別な時の流れと空間の中にとつぷりと心身を置きながら、現代の時空を超えて徐々にタイムスリップしていくような不思議な感覚に包まれていく。日本全体がバブルに向かおうとする1984年10月末のことであった。



写真97-2 鬼の舞



写真97-3 本殿に向かう行列